

## 応用生物化学系

教員数	教員等数 (人)	教 授 19 (19)	助 教 授 11 (10)	講 師 14 (14)	助 手 10 (10)	技 官〔準研〕 1 (1)	
	異動状況 (人)	退職・転出 1 (6)	昇 任 4 (1)	採 用 6 (2)	学 内 -		
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学 会 発 表 数			
		国 内	国 外	国 内	国 外		
		47 (64)	112 (147)	202 (191)	38 (48)		
	受賞数(件)	2 (3)					
	研究費等		採 択 件 数	採 択 率 (%)	金 額 (千円)		
		科学研究費	37 (32)	46.3 (42.1)	153,100 (134,400)		
		学内プロ	17 (16)	42.5 (41.0)	16,250 (7,720)		
奨学寄附金件数・金額		20件	16,850千円	(33件	27,400千円)		
受託研究件数・金額		20件	72,031千円	(21件	65,692千円)		
受 託 研 究 員	6人 (3人)						
施設・設備							

・ ( ) は前年度の数値を示す。

### 1 応用生物化学系の活動

- 平成15年度の当学系の人事異動：採用者は6名（助教授1名：特プロ、講師1名、助手4名：特プロ、学内プロS、COEおよびTARA）で、退職者1名（助教授）であった。
- 研究活動：研究活動は、上表に示すように、今年度も活発に行われた。研究発表件数は、国内および国外とも昨年とほぼ同様な傾向を示した。特に、国外への論文著者発表数から見ると、研究活動が国際化していく傾向がうかがえる。研究費等に関しては、科学研究費の採択件数・金額とも着実な伸びを示し、また、学内プロの金額では大幅に増加した。奨学寄附金と受託研究件数・金額はいずれも昨年より減少傾向を示したが、社会の経済的不況を反映しているものと考えられる。ただし、受託研究にNEDO・TOREST・SORSTを含めると、24件で159,196千円となり昨年の2倍以上となる。さらに、産官学連携促進事業としての茨城県科学技術振興財団（教授1名：21,993千円）およびタンパク3000プロジェクト（教授2名：20,000千円、継続分）の受託研究も含まれる。なお、本学系の構成員を主とした生物機能科学専攻では、21世紀COEプログラムに採択され、本年度も活発なセミナー・シンポジウムなどが開催され、本プログラムの研究テーマである複合生物系応答機構の解析と農学的高度利用に関する研究・教育が大いに進展し、本年度74,000千円を受領した。
- 国際交流活動：活発に行われており、本年度もカセサート大学、忠南大学、フィリピン大学ロス・バノス校等との学生や研究者の交流が行われた。

### 2 自己評価と課題

本年度は、1名の助教授が定年退官となり、助手4名・講師1名・助教授1名が採用され、益々、学系全体が若返りの時代を向えている。法人化後の21世紀前半の大学を担う人材の選考が引き続き重要な課題となろう。研究活動に関しては、国立大学法人化後、特に外部資金の獲得において学系構成員のさらなる活性化の努力が必要となるであろう。教育活動では、従来とも、関係する学類、修士・博士課程各研究科において積極的に尽力している。

### 3 その他特記事項

本学系を含む農林3学系の構成員で構成される農学研究科リフレッシュ教育システムを対象とした施設と大学院重点化等の施設を含めた総合研究棟Aが平成15年2月に完成したが、慢性的な研究スペースの問題を少しでも緩和するため、自助努力として学系棟の実験室などの改修を行った。